

第 1 回世田谷区総合教育会議

令和 3 年 7 月 21 日（水）

午後1時開会

○司会 それでは、定刻の午後1時となりましたので、令和3年度第1回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

私は、会議の進行を担当いたします政策経営部政策企画課長の松本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日はオンラインでの多くの方に御視聴をいただいておりますので、初めに、全体のスケジュールを御案内いたします。本日は、この総合教育会議を第1部として、それに引き続き、午後2時25分頃からは教育推進会議を第2部として行います。皆様には、長時間になりますが、何とぞ最後まで御覧いただければと思います。

それでは、早速、総合教育会議を始めます。開催に先立ちまして、保坂区長より御挨拶申し上げます。区長、よろしくお願いいたします。

○保坂区長 皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂展人です。

いよいよ、この総合教育会議の中でもずっと論じ合ってきた教育総合センターが間もなく、もう若林小学校の跡地には新しい建物が建って、工事用の塀が撤去されて、かなり大きなボリュームの建物だなという姿が見えてまいります。今日はその開設直前ということで議論を深めていただきたいと思います。

また、振り返りますと、去年は今に続く新型コロナウイルス感染症の当初、まだまだウイルスの特徴が分からない時期の中で、3月、4月、5月と長きにわたって学校の臨時休業、学校がずっと休みになるという時期が続きました。当初、子どもたちも休みは長いほうがいい、こんなふうに思っていたお子さんたちも、あまりにも学校が長くない、こういう状態の中で、保護者の中から、オンラインで何かできないだろうか、ユーチューブの配信をしたり、インタラクティブにお互いが語り合う授業のようなことがやれるではないか、ほかの自治体では現にやっている学校もあるよと、こういう声上がり、今日の後半、第2部には、まさにこのICT教育、この1年で大きく世田谷区の学校現場は変わったかと思います。GIGAスクールの構想に基づく1人1台タブレットも実現をしました。

そして、今日のこの第1部、総合教育会議では、いよいよ教育総合センターが立ち上がるわけですが、大きな変わり目に私たちはいると思っています。ICTだけではありません。かつて多く覚えて、正確に暗記をして、これをテスト等でしっかり正確に再現をしていくというような力が学力の基本となっていた時期がありましたけれども、やはりこれから先の時代、本当にどうなっていくか分からない。気候危機も年々深刻度を深くしており

ます。こういった中で、子どもたちが自ら主体的に課題を見いだし、そして友達と協力してチームで力を合わせて課題に取り組んでいく、文部科学省の言葉によれば、主体的で対話的な深い学びと、この内容は一体どういう内容なのかということはこの会議で何年間にわたって論じてきました。やはり学びの質の転換が必要だろうと。では、どう転換するのか、その部分を、世田谷区の約5万人の小中学生が通っている学校の現場を底から持ち上げていくような支援機能、また、世界中の知見を集約し、この地域の中の資源と結びつけて展開をしていくような、日本中まだどこにもないような教育総合センター、こんな抱負を我々は語り合っているところです。

今日御覧になっている区民の皆さん、保護者の皆さんとともに、その課題意識を共有して、12月のオープンを迎えられたらと思っております。

今日はよろしく願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

ここで、本日の会議に参加されている教育委員会の皆様を御紹介させていただきます。

まず、渡部教育長です。

澁澤委員です。

宮田委員です。

亀田委員です。

中村委員です。

皆様、どうぞよろしく願いいたします。

教育長、教育委員の皆様には、後ほど意見交換のところでお話を伺いたいと思います。

それでは、第1部、総合教育会議の流れについて御説明いたします。本日は、「教育総合センターの開設に向けて」をテーマといたしまして、まず、教育総合センターの理念や実施内容等について、教育委員会事務局管理職より御説明をさせていただきます。説明の内容を踏まえまして、2つの議題で意見交換を予定しております。1つ目が、教育総合センターの機能、実施内容について、2つ目が、地域と学校を結ぶための教育総合センターの新しい機能に期待すること、これらの議題について、区長と教育委員会の皆様とで意見交換を行っていただいた後に、最後に区長より全体の総括を行っていただく予定でございます。

それでは、早速ですが、説明に移りたいと思います。

教育総合センター開設に向けて、教育委員会事務局栗井教育監、平沢教育参与より御説

明をお願いいたします。

○粟井教育監 教育委員会事務局の粟井と申します。私からは、「教育総合センターの開設に向けて」ということで若干のお話をさせていただきたいと思います。

その前に先立ちまして、自己紹介を兼ねてになりますけれども、本年3月まで行っていた仕事ということで、私は3月まで文部科学省におりまして、安全教育推進室というところで仕事をしておりました。その中で、2年間私が行っていたのは、学校における安全教育の仕事でございました。今の新生児は110歳ぐらいまで生きると言われておりますが、長い生涯にわたる安全に関する資質、能力の基盤を養うという、自助がメインになると思いますけれども、加えて、2つ目のポツになります。将来、社会人となって、社会全体の安全意識の向上や安全安心な社会づくりに寄与する意義ということで、自助に加え、共助であったり、公助にも関わる部分ということで、学校における安全教育ということでは、長い生涯にわたる中でも、自らが進んで安全安心な社会づくりに寄与していくというところを養っていく、そこが肝心であると思います。

現在想定される危機事象といたしまして、首都直下型地震であったり、南海トラフ巨大地震、台風、それから熱海のような線状降水帯による豪雨などが考えられます。また、八街市におけるような登下校中の交通事故や、2年前に川崎市の私立小学校でも登校中の殺傷事件がありましたし、教育活動中の事故では、例えば部活動中であったり、体育の授業中など、いろんな事故は起こり得るわけですが、それに加え、熱中症の対策、SNSに関連した犯罪に子どもが巻き込まれるケースも危機事象の対象と考えられるところでございます。

そのような中で、子どもたちに対しては、どのような状況下においても自分の命を守り抜き、安全安心な社会実現のために、主体的に行動する態度を育成する教育が不可欠となっているということで2年間仕事をさせていただいたところでございます。例えば安全教育で申しますと、クラッシュ症候群という言葉が阪神・淡路大震災以降も出てまいりました。こちらは、瓦礫に手足を挟まれてしまって苦しんでいる方がいらっしゃる。クラッシュ症候群というのは、別名スマイリングデスと言ったり、グレイトフルデッドという別名があるわけですが、手足を挟まれておると、手足が壊死してしまうことによりまして、筋肉細胞が壊死した場合には、ミオグロビンやカリウムといった毒素がそこに蓄積されるわけですが、それを瓦礫から解放した途端に、その毒が全身に回り、心停止が起こってしまうということで、これは安堵感の中でお亡くなりになると

いうことでスマイリングデスと呼ばれているものでございます。例えば子どもがそういう場面に出くわしたときに、瓦礫に挟まれている人を直ちに助ければいいのか、それともその手足の状態を見て、今、ちょっと瓦礫を外すのはいかがかというような対応なども、子どもたちが知っていてもいいのかなと思うわけでございます。

また、避難所生活において、子どものミルクがないときには、大きじ1杯の砂糖に200ミリリットルの水もしくはぬるい、子どもが飲めるような状態の水を入れることによって、子どもは1日もしくは2日ぐらいは生きられるということなども阪神・淡路大震災の中から出てきた知恵でございますが、そういった経緯なども知って、臨機応変に対応できるようにすることが1つの安全教育の事例として行われているところでございます。

例えば東日本大震災では、津波の速さというものは、深海約5000メートルでは800キロというジェット機並みのスピードで押し寄せてくるわけでございますけれども、水深1メートルのところでも時速34キロと言われておりまして、これは100メートルのスプリンターが全力で疾走するのと同じぐらいのスピードで押し寄せてくるといったことなども、算数、数学に絡めて防災教育の一つとしてもいいのかなと思っているところでございます。

それから、安全教育の推進という仕事を経て、これから取り組みたいということでございますが、あらゆる物事に自信を持って主体的に行動できる子どもたちを育てたいと考えております。つまり自信とは、どのようなことがあっても何とかかなりそうだ、何とかできると思えることでございます。やはりその自信を持てるためには、予測する力というものを養っていかなければなりません。そのためには、物事の由来を知り、考えながら、多種多様な経験を数多く踏むということによって予測する力が備わることになりまして、自信を持つことにつながります。

例えば「チョコちゃんに叱られる！」というNHKの番組がございますが、あれでは、やはり物事の成り立ちみたいなものが非常に理解できるわけでございまして、物事の成り立ちを理解すれば、現在はこう至り、そしてこの先どうなるかという1つの予測をできる力につながるのではないかと思います。先哲の教えなどは大事なのかなというところがありますけれども、そういったものを知ることによって自信を持っていただく、そういう教育が行われればと思っております。

現在はVUCAの時代に入ってきておりまして、予測が難しくなってきておりますが、その中で、「せたがや探究的な学び」を進めていきたいと思っております。

そして、センター設置の趣旨に入りますが、教育の質の転換を担う学校の先生方に対し

ても、課題解決型の協働的な学びや探究的な学びに変えていかなければならないわけですが、従来のチョーク・アンド・トークによる講義型の教え込む教育ではないと思います。他人の意見や思いというものを受け止めて、そしゃくした上で、自分の考えを相手に分かりやすく説明するような授業の展開というものが求められておまして、研究によれば、ラーニングピラミッドというものがございますけれども、人に対して物事を教えるときに最も脳が働くと言われております。教えるというのがトップであり、続いて体験、グループディスカッション、実施見学、視聴、読書、講義の順となっております、講義型で教え込むというのは最も脳が働かないやり方でございます。そういったところなども考えながら、これから子どもたちにどのように問いかけをしていくか、ファシリテートをしていくかといったところが、先生方の役割として求められてきているのではないかと考えるところでございます。

こういった観点で、学校やその園の立場を様々な視点から支える体制の構築というものも必要となってきております。ちなみに、昨日、7月20日でございますけれども、文科省の中央教育審議会の下で、幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会の第1回というものが開催されたところでございまして、5歳児の教育を含めどのように今後は幼稚園、それから小学校等の連携ができていくのかについての議論が始まったところでございます。こういったところにも動向に注目をしていただければと思っております。

区といたしましては、こういった課題に対応するために、子ども支援であったり、保護者支援、そして教員支援の機能を持つ教育総合センターを開設し、先生方、それから子どもたちに対して斜め後ろからの支援をしていくというようなことができればと考えているところでございます。

長くなりましたが、以上でございます。

○司会 では、引き続き、お願いいたします。

○平沢教育参与 よろしくお願いいたします。教育参与の平沢と申します。新しい教育総合センターのセンター長を務めさせていただく予定でおります。

教育総合センターは、これからの世田谷区の教育を区内の様々な教育資源、教育資産を活用しながら、強力で推進していく役割を果たすことが求められています。そのために、今回の教育総合センターを単に主管課の引っ越しにとどめることなく、これからの世田谷区の教育をよりよくしていくための新たなムーブメントを起こしていきたいと考えています。そして、その新たな取組は、12月の開設を待つことなく、既に検討段階を終え、試行

実施に入ったものもあります。限られた時間ではありますけれども、今後の取組内容として御報告をさせていただきます。

教育総合センターの開設までの期間、3つのことを念頭に取り組んでいます。円滑な開設、情報発信、充実した運営でございます。先月、教育長と現場を見てまいりましたけれども、教育総合センターはそれぞれのフロアの工事も順調に進んでおります。9月の下旬には竣工、10月下旬に引渡し、11月から12月中旬までに引っ越しを終えまして、12月20日の開設を迎えるという予定で進んでおります。

ここからは、その開設に向けてどのような準備や取組を進めているかお伝えしたいと思います。

まず、情報発信でございます。お示ししましたように、センターだより、センターのリーフレット、センターのホームページの開設等を進めてまいります。センターの運営につきましては、教育委員さんや、保、幼、小、中の代表の方に入っていただく運営協議会を7月27日に開催する予定でございます。ここで今後の事業計画や主要研究テーマなどについて御意見をいただきながら進めていきます。

冒頭申し上げましたけれども、単なる引っ越しに終わることなく、教育総合センターが区長部局、大学や企業等と連携した新しい取組を進めていくのか、既に実施や試行に入っているものもありますので、幾つか紹介していきたいと思っています。引っ越しにはとどめない、様々な機関との連携を進めてまいります。

まず、教員への支援でございます。新たな取組として、区長部局にある区の施策などを研究しているせたがや自治政策研究所との連携事業についての検討を始めていたり、この夏、区役所の職員向けの研修に教員が参加するというような準備を進めたりしています。

子どもへの支援では、新たな不登校対策としまして、ほっとスクールのオンライン化に向けて、NPOと協働しながら試行を始めています。また、東洋大学との連携事業として、医療的ケアを要する児童支援として、分身ロボット、OriHimeの研究を始めています。また、8月7日には、不登校やその傾向にある生徒を対象にした進路説明会、相談会を実施します。

新たな取組の2つ目として御紹介します。教育総合センターでは、乳幼児教育支援センター機能を持たせることが大切な役割になっています。その一環として、仮称ですが、乳幼児教育・保育の方針・指針の策定を進めています。また、乳幼児教育・保育のワークショップを既に複数回実施し、大変好評をいただいています。

また、教育総合センターの新しい機能として、学校と地域を結び、その教育資源を活用した学校教育の充実支援があります。その一環として、地域人材確保に向けた事業をスタートさせる予定でいます。また、民間活力を活用して、新しい教育であるSTEAM教育の推進に関する事業を進めたり、教育総合センターの新しい目玉として1階に設置する交流エリアの企画、運営等を進めたりします。

世田谷区の新しい教育、授業が活性化し、子どもの生き生きした活動や表現によってその成果が現れるために、開設される教育総合センターがその役割を果たしていきたいと思います。

この後予定されている教育推進会議でお話が進められるICT活用による授業革新についても教育総合センターは様々な支援を進めていきます。ICTインフルエンサー、ICT支援員、教員研修、今度整備されますセンター内のスタジオの活用の準備を進めたり、さらに情報やコンテンツの提供なども進めてまいります。授業の担い手である先生と子どもたちに、教育総合センターがこのような支援を通して、ICTを活用した授業で示されているような4つの授業が充実するように取り組んでまいります。

今後も、教育総合センターをしっかりと立ち上げ、充実した支援が進められるように努めてまいりたいと思います。

御清聴ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。

それでは、意見交換に移りたいと思います。意見交換の1つ目の議題は、教育総合センターの機能、実施内容についてです。

まず、区長にお伺いいたします。今年の12月に教育総合センターを開設予定ですが、予算の編成、執行権を有する区長より、構想段階から後押ししてきた立場から、教育総合センターの開設、機能やその取組についてどのような思いをお持ちか、この間の経緯も含めて思いをお話しいただければと思います。

○保坂区長 先ほどICTの分野、今日の第2部のテーマですが、世田谷区の学校も大きな変化の波を受けたという話をしました。実はICTに限らず、起立、礼、着席、板書をして、ノートを広げてこれを写しという授業のスタイル自体、明治以降、ある意味で安定的に続いているわけなんです。この学び方そのものの大きな変革期に世界中の教育が入っています。今、栗井教育監のほうから、予測困難な時代に主体的に生きる課題解決型協働的な学び、協働的なというのは、1人でどんどん覚えてほかの人に教えないということ

ではなくて、友達とともにお互い補い合って協働作業していくという意味だと思いますが、そして、そのチームで探求する、分からないことに対してアプローチをかけていくということについて、やはりそういう人材を教育の場でもっともっとつくってほしいというニーズが、これは様々な現場、いわゆる企業だけではなくて、福祉の現場でも、あるいは自治体の現場でも求められているところでもあります。

そして、平沢センター長からは、単なる引っ越しに終わらないというお話がありました。実はこれは私のほうで、ぜひ引っ越しに終わらないでくれということを繰り返し申し上げてきています。現在も世田谷区で教育センターが弦巻にございます。これから新しい教育総合センターのほうで、当然、これまで教育委員会、あるいは教育センターとしてやってきた教育相談であるとか、あるいは学校支援であるとか、教職員の研修だとか、そして新たに乳幼児の研究センターだとか、ICTの支援だとか、様々、いわゆるベーシックな部分について、平沢センター長を中心にしっかりやっていただくということに期待をしています。しかし、その内容だけだと、やはりちょっと引っ越しと言われても相違はないよねと。

恐らく平沢さんのおっしゃった後半の部分、地域との連携、これは、よくどの自治体でも地域との連携という話がありますが、今私たちが直面しているのは、予測不可能な時代、国と国の国境をたやすく越えていくこのパンデミック、ウイルスの登場、グローバル社会、そしてそのグローバル社会の中の様々なひずみ、格差、こういうことの中で、社会の不安定さ、これまで普通のコロナ前には見えなかった部分が、だんだん見え始めてきている。こういう中で、これから一体どういう仕事をしていくのがいいのか、どのような社会的な役割、あるいは大げさに言えば、時代が求める、生き延びるための、地球の危機に直面をしながら、そこをしっかりと解決していけるような力、ここは学校教育、学校の先生方、よろしくお願ひしますということだけではいけないんじゃないかと。実は世田谷区には17を超える大学がございます。テンプル大学なども三軒茶屋に新しく校舎を移しました。この大学という資源、それぞれの専門家の先生方、大学のゼミ、様々な活動をしていく中で、どの大学も共通なのは、地域にどのように関わるか、貢献するか、そして地元の小中学生も含めた子どもの育ち、学びにコネクしていくということにおいては、どの大学でも非常に協力的な姿勢を示していただいています。

加えて、新型コロナのこのパンデミックの時期を挟んで新しい仕事は次々と生まれてきています。これは非営利型、実は営業利益を唯一の目標としないで、むしろ地域の福祉だ

とか、あるいは人生のよりよき充実だとか、コミュニティーというところにもう一度着目して、お互いが助け合ったり、気を配ったり、お互いさま、おかげさまの世界でつくり上げていこうなどの事業をSNSなどを通してアプリで実現したり、そういう若手の起業というのが相当今世田谷区にも出てきています。ぜひお願いをしたいのは、教育、学校の世界の外側に大きな変化がある。もっと言えば資源があります。この資源と子どもたちはシンクロしています。一緒に同じ空気を吸いながら生きています。なので、ぜひこの教育総合センターの発足を機に、学校が学校としてしっかりと歩んでいくことをベースにしながらも、世田谷区92万人のこの町の中で、様々な知的な想像、冒険、また資産を持っている。大学だけではありません。様々な研究機関もありますというところを世田谷区共通の子どもたちに全部それをプレゼントしてあげられないだろうか、そして子どもたち自身が世田谷で学んでよかったと、学校というのは、教育というのは学校と建物の中にだけあるのではないなという1つの価値革命をこの教育総合センターの中でしっかり魂を宿らせてほしいなど。そういう意味で本当の教育改革、地に足のついた地域に根差した教育改革を大きく期待しているところでございます。

以上です。

○司会 ありがとうございます。区長からは、教育、学校以外の外の資源、そことのつながりを子どもたちにプレゼントしていくと、そういった大きなお話をいただきました。

それでは、続きまして、教育委員の皆様にもお話を伺います。先ほど栗井教育監、平沢教育参与より、教育総合センターの機能、取組等について御説明をいたしました。この内容も踏まえましてお伺いしたいと思います。

まず、宮田委員にお伺いいたします。宮田委員は、元区立小学校PTA会長で、世田谷区立小学校PTA連合協議会会長の経験などもおありですが、教育総合センターの取組についてどのように捉えておりますでしょうか、お伺いします。

○宮田委員 宮田でございます。

今、区長からお話のあった本当の教育改革、地に足のついた教育というものが大変心に響いております。

教育センターは、子ども支援、保護者支援、教育支援の機能を持つ世田谷の教育を推進する拠点で、新しい時代に必要な教育への転換をしていく様々な取組がございます。子どもや保護者が抱えている様々な課題や困難に、今までは相談内容によって個々に対応となっていました。福祉部門との連携等、総合的な教育相談体制の構築と途切れのない支援

は、家庭、学校だけでは解決できないことも多くある中、子ども1人1人に寄り添った適切な支援が提供されます。また、教員の皆さんが授業研究や専門分野の研究等、教員が必要とする様々な支援は、学校での子どもたちの学びにもつながると思います。

社会の変化が人々を取り巻く環境を変える中で、子ども、保護者、教員が抱えている課題に対し、解決に向かうことができるよう、教育総合センターで行う支援、取組はとても重要だと考えております。保護者、区民の皆様にとどのような事業が展開されるのかを知っていただくことが大切ですので、区のホームページ等での周知を引き続きよろしく願いいたします。

教育委員会では、地域とともに子どもを育てる教育ということで、地域と学校が連携した取組を進めております。地域人材を集約、活用する仕組みを構築して、大学や民間企業等の連携により、学校運営や教育活動の人的支援を行うことは、多様な教育活動や児童生徒が様々な体験をするとても大切なことと思っております。こういったことは、キャリア教育にもつながり、今後、私としても大変期待しております。

以上です。

○司会 ありがとうございます。地域人材を活用する取組への期待などをお話いただきました。

続きまして、中村委員へお伺いいたします。学校長としての経験もあり、教育の現場経験の長い中村委員ですけれども、センターの取組について期待することなどをお伺いできればと思います。

○中村委員 中村でございます。学校の立場から期待することを述べさせていただきます。

今回のセンターの構想は、私も行かせていただきました数年前のオランダの視察のときに見学しましたオランダの教育サポートセンターが1つの参考モデルになっていると理解しております。

やはり私が期待するのは、3つの機能、まず1つ目は、教員支援のための教育サポートセンターであってほしいということです。特にオランダでは、1970年に画一から個別への転換ということで、今まさに日本で行われようとしている転換が、もう既に50年以上前に行われ、この教育センターが立ち上がりました。そのように、教員の研修支援としての機能、特に各学校のオーダーメイドの研修のコンサルティングを行っていただくようなセンターであってほしいなと思っております。

2つ目は、シンクタンクとしての機能です。やはり区でも学力調査、学習習得調査等を

やっておりますけれども、そういったものを総合的に分析して、それで区の施策に生かしていくようなシンクタンクの機能も持ってほしいなと思っております。

それから3つ目、人材に関するお話がこの後もありますが、実は学校というところは、物に例えるならば、スタメンだけで試合をしているようなチームと思っていただければよろしいかと思えます。最近のニュースでも学校の職場のブラック的なところというのは、実は非常勤の先生が足りないんだという、そんなようなニュースもありました。学校の先生が病気で休むと、簡単に代わりは見つからないんです。まずもちろん免許がなければ駄目、それから都のルールでは、名簿に登録している講師の中から選びなさい。ところが、そういう名簿に登録されている方は、ほとんど年間契約が決まっていて、年度の途中ではなかなか後任が見つからないというのが現状です。そのたびに各学校、その負荷が副校長先生や専任の先生に行っているという実態があります。人材活用ですと、ゲストティーチャーというイメージになりますが、実は学校現場ではそういうショートリリーフが大変求められています。現役世代だけでなく、ぜひ再任用も含め、退職された先生方や、そういった免許をお持ちの方の協力を仰いで、ぜひ世田谷独自のそういう学校リリーフシステムみたいなものを築き上げていただけると学校としては大変ありがたいと思えます。どうかよろしくお願いいたします。

以上です。

○司会 ありがとうございます。学校リリーフの仕組みなど3つの期待する機能についてお話しいただきました。

続きまして、澁澤委員へお伺いいたします。澁澤委員は、NPO法人理事長も務め、地域や大学、様々な企業にも関わりをお持ちですが、センターの取組についてどのような思いをお持ちでしょうか、お伺いいたします。

○澁澤委員 実は今日、この場所で皆さんにお話ししようと思っていたことをほとんど保坂区長に言われてしまって、多分視点としてはとてもダブることになるかと思うんですが、私なりの切り口からちょっとお話をさせていただこうかなと思っています。

こうやって教育委員会にいて、いろんな現場の声を絶えず聞いていると、それに対してケアをしなきゃいけない、あるいは一緒に寄り添って伴走しなきゃいけない、やることのメニューというのは山のように出てきます。多分それが教育センターにすぐ投げ込まれてきて、そしてぜひ学校現場を支援してください、先生を支援してください、あるいは支援を必要としている子どもたちを支援してください、あるいは保護者を支援してください、

いろんなことに多分対応していくことになろうかと思います。ただ、まだオープン前の今の時期ですので、少し俯瞰的に今日はお話をさせていただこうかなというふうに思っています。

今、世の中では、すぐコロナ禍、この後、アフターコロナですとか、あるいはポストコロナと言われているこのコロナの後に一体どういう社会が登場するのかということが議論されるようになってきました。ただ、それに対しての正しい答えというのは多分見つからないだろう、これから模索をしていく。ただ、時代の変換期に来ているということとはとてもよく分かるということかと思っています。

例えば教育の現場では、ICT、皆さんにタブレットが配られるようになりました。私は今、都内の大学で教えています。去年1年間、ほとんどが大学の授業はオンラインで授業をやってきました。今の大学生たちは全員スマホを持っています。それから何割かの学生たちはタブレットやパソコンを持っていますから、ある意味では、今の小中学校の子どもたちと同じ環境です。なおかつ、彼らはもう生まれたときからずっとスマホを扱い慣れていますから、そうやってソーシャルネットワークを通したコミュニケーションは大変発達しています。そこで、私たちがオンラインで、ソーシャルネットワークで講義をしました。最初、私たち教員側がとても模索をしていきます。むしろ生徒側からは好評な声もとってもありました。自由に自分のペースで、そして取り残されないで授業をずっと受けることができる。このスタイルをぜひ今後、続けてほしいというような要望が、むしろ学生の側からたくさん出てきました。

ところが、半年ぐらいすると、何人かの学生が、そのスマホを通した授業というものに限界を感じて、むしろ孤独感を強烈に感じるということを言い出す学生たちが増えてきて、そしてちょうど1年半ぐらいたった、今年の前期の期末の答案をみんな読んでみると、ほぼ全員の学生が対面授業を復活させてくれという強烈な要望が書いてあります。つまり、GIGAスクール構想にのっとったこの教育の手法というのは、決して1かゼロかではないということだと思います。こうやってタブレットを通して伝えて、そのほうが伝えやすい部分、あるいは対面で1人1人に合わせて、あるいは子どもたち同士が議論をしながら、自分の中で身につけていくこと、そういう非常に複雑な手段をどう構築しながら、子どもたちの未来に一番有益な形はどのような形なんだろうということを、多分これから全員で模索をしていく。それは何も教育センターのスタッフだけではなくて、子どもたちも多分模索をしていくんだと思います。教員も模索をしていく。ただ、今までのように、教育委員

会、教員、子どもという一方通行ではなくて、その双方向のディスカッションの中に多分新しい形、世田谷らしい形というものが生まれてくるんだろうと思っています。

そうこうしているうちに、A I、I o Tはどんどん私たちの暮らしの中に入ってきます。つまり働き方が変わる。今言いました教育の仕方、コミュニケーションの方法が変わると同時に、親たちの働き方も変わります。これから今の小学校5、6年生が大学を卒業するときには、65%以上の子どもが今は存在しない職業に就くというような研究結果が出てまいりました。例えば皆さんが御存じ、小学生たちにとっても人気があるユーチューバーという職業は、今から10年前は誰も知りませんでした。考えつきもしませんでした。なおかつ、そのまた10年前は、携帯を持っている子どもなんて誰もいませんでした。スマホではなくて携帯です。それぐらい時代は急激に変化をしていきます。そのときに働くということが、今までのように生産性を上げるという働き方から、どうやって自分が生きている意味を問うていくのか、ある意味ではミーニング・オブ・ライフと言われているような形に変わっていく。先ほど区長からもお話が出たように、今の学生さんたちは、どういう職業に就きたいかとか、どうやって自分がお金を持ちたいかとかというd oよりも、どう生きたいかというb eをとっても重要視する学生が増えてきました。どういう生き方を見つけていくか、まさにその生きるということは、職業選択ではなくて、生き方を自分でつくっていくんだということを今の大学生たちは思い出し、多分今の小中学生はそれ以上にそういうことを考えるような時代になっていくと思います。

同時に、それは今の金融機関、資本主義というものの行き詰まりも表しています。私のひいじいさんがこの国に資本主義を持ち込みましたけれども、その資本主義はまさに曲がり角です。かつて資本主義というのは平等な社会をつくるためのいいツールでしたが、今は、世界の26人の人たちが世界の低位38億人以上の資産を持つというふうに言われています。金融資本というものが膨大に膨れ上がりました。私たちが暮らす実体経済の何百倍という金融資本がこの世の中に存在をするようになってしまった。コロナでこれだけみんな飲食店の方々、あるいは交通関係の方々、観光の方々がもう明日どうなるか分からないという状態になっているときに、株価を見ていただくと、3万円近い高値をずっと維持している。つまり私たちが生きるために使っていた経済が、全く違う形を持ち始めたのがこの10年、20年、30年という、要するにパソコンが普及してからの時代になってきました。そのとき、お金というもの、私たちがふだんの生活の仕組みの基礎の部分、インフラとしてのお金がもう性質が変わってきた。それがどういうふうになることがいいのかということ

は、大人の経済学者たちにはほとんど今アイデアがありません。つまり、今の子どもたちが大人たちと一緒に考えていく問題ということです。

そして何よりも、もう御承知のとおり、環境問題です。SDGsはあと10年でもう折り返しができない、つまりどんなに10年後からいい技術ができて、いい社会システムができて、環境問題の悪化を止めることがもうできない地点を超えてしまう。つまり私たちが新しい社会の仕組みをつくる残された時間はあと10年だということを述べています。胸にSDGsのバッジをつけた方々をたくさん見ます。だけれども、その方々がそれに対しての答えを持っているわけではありません。企業が持っているわけでもないし、大学が持っているわけでもない。まさに一緒に考えていかなきゃいけない。その「一緒に」の中には、先ほどから言いましたように、子どもたちも入るということです。以上のような課題、それが多分これからの教育の形になっていく。その中では、自分で判断でき、先ほどからずっとお話しになっている自分で予測ができて、そして自分でディスカッションができて、そして一緒に考えていけて、一緒に考えるコミュニケーションのある程度手段も持っているというような子どもがどうしてもこれからはたくさん必要になってくる。子どもたちはやはりそういう能力を持つことが、これからはそれぞれの科目のいい点を取る子よりも、そういうことを総合的に考えられる子どもたちというのが、これからの時代の主役になってくる子どもたちなんだろうというふうに、そこまでは私たちも予感をしています。

そういうような社会に導く、あるいは社会と教育、あるいは教育と子どもたちの間のファシリテート、あるいはコーディネートをやっていく機能が多分今度つくられる教育センター、教育というのはまさに未来をつくるという仕事です。子どもたちがこれから活躍する未来をどう私たちがデザインし、そしてそれを子どもたちに渡していけるか、あるいはそこに参画してもらうか、そんなようなまさに社会のファシリテート機能の役目を教育総合センターがつくっていけるように、私たち教育現場、あるいは教育委員会も一緒になって、まさに新しいものをつくる。今まで世の中のどこにもないものをつくるという気概でやっていきたいなというふうに思っております。

○司会 ありがとうございます。様々な社会の変化に対し、総合的に考えられる子どもたち、それをコーディネートする機能がセンターに求められるといったお話をいただきました。

続きまして、亀田委員へお伺いいたします。亀田委員は文部科学省に在職中、教育政策を立てた経験もあり、また、子どもたちの特別支援教育について造詣が深いと伺っております。

ます。これまでの行政経験や不登校支援の御経験などから、センターの取組についてどのようなお考えをお持ちでしょうか、お伺いいたします。

○亀田委員 ありがとうございます。亀田でございます。私からは、センターの機能について2点申し上げたいと思います。

1点目は、相談機能という点です。私は、保護者の方々への支援を重視することが必要と考えています。というのは、もともと教育委員会には事務局がありまして、学校への支援は、センターと同時に事務局も行うこととなります。他方、保護者の方への直接的な支援は、センター独自の機能でございますので、事務局では十分に実施できていない部分、そこを担うのがセンターの機能としては重要かと考えるからです。

具体的には、例えば不登校のお子さんの保護者の方々とお話をすると、不登校に関する情報が学校からはなかなか提供されない。例えば不登校の間の給食費はどうすればいいとか、成績はどうなるかと。もちろん学校に聞けば、学校としては教えてくれると思いますが、保護者の方としては、そもそも何を聞いていいかも分からないと思います。特に進路の情報が不足している。不登校の場合、高校段階でどのような進路先があるか、それぞれの学校にはどういう特徴があって、そこではどのような学校生活を送ることができるのか。都立であれば、今チャレンジスクールとか、エンカレッジスクールがありまして、最近では、通信制高校とか、私立であれば高等専修学校というのもあります。これらについて、書類上の情報だけでなく、例えば実際に学校を訪問して、生徒の様子を見たり、学校から話を聞くことで、実際に役立つ情報が得られると思います。

それをまた別の観点、角度から申し上げますと、大事なことは、保護者の方々がどこにお困りになっているかという声を伺って、それを分析して、必要な方策を考えることだと思います。先ほどの例で言えば、これまでも不登校に関する相談、相談自体は多数あったと思いますが、その分析が十分になされていなかった。今の進路情報が不足しているというような分析が十分になされていなかったと思います。私たち教育委員に対しても、相談の件数の御報告はいただきますが、その分析、例えばどこの学校でどのような課題があるとか、今のような保護者の方々が何に困っていらっしゃるかという分析がこれまで十分であったとは言い難いと思いますので、相談事例の蓄積と分析、そして分析結果に基づく方策の提案が必要だと思いますので、ぜひそれを今後センターで担っていただきたい、担っていきたいと思っております。

2つ目は、データの分析です。先ほどの話とも若干重なる部分もありますけれども、こ

れまで事務局として必ずしも十分に実施できていなかった部分として、教育に関するデータの分析があります。データの分析によって、世田谷の教育において何が求められるか、あるいはお子さんにどのような教育を提供するかという提案をしていく機能が必要であり、それをぜひセンターで着手してほしいと思っております。

例えば今埼玉県では、学力調査についてデータの活用に取り組んでいます。県独自の学力調査によって、小学校4年生から中学3年生までの間、1人ずつの同じお子さんの学力の変化を継続して把握できるようなテストを設計して、統計的に分析できるようになっています。さらに、今では学力調査のデータをAIで分析をして、1人1人のお子さんのつまずきポイントを提示して、個別のアドバイスを行うような実践研究に取り組んでいます。こうしたデータ分析による学習支援についても、センターで着手できるといいかなと思っています。

最後に、このようなセンターが先進的な新たな機能を担うためにはどうすればいいかを考えてみたいと思います。私は、そのために必要な人材をセンターに配置する必要があるのかなと思っています。先ほど申し上げたようなデータ分析をするには、それができる、あるいはそのプロジェクトのマネジメントができる人材を配置するとか、あるいは先ほどの保護者の方への支援のためには、例えば分かりやすい資料を作るためにも、デザイナーの配置とか、そういうこともあってもいいかなと思っています。今申し上げた点に限らず、センターでこれまでないような新しい機能を担うことができるようにするには、それができる新たな人材の配置が必要であるという点を考えてみたいと思っております。

以上でございます。

○司会 ありがとうございます。保護者の支援であるとか、データの分析、またそれに関わる人材の配置についてお話をいただきました。

それでは、このテーマの最後に教育長にお伺いいたします。今、区長、それから教育委員の皆様からお話をいただきましたが、今後、教育総合センターについてどのような展望をお持ちになっているかお伺いいたします。

○渡部教育長 様々に教育総合センターへの期待をいただいたと思います。今、それぞれの委員からいただいたことは、後でちょっとまとめさせていただきたいなと思います。まずは、教育総合センターへの展望ということでお話をさせていただきたいと思います。

今を生きる子どもたちのためには、やはりこの急激な社会の変化に応じて、教育も変えていく必要があると思います。教育は3つの変化が必要だと考えています。まず、1点目

が学び方の変化です。今までは、教員が教えるという指導をしていました。でも、これから先は、子ども自らが学び取るという教育へ変えていく必要があると思っています。このことに関しては、ICTの活用が追い風になると思っています。

そのように教育を変えていくには、2点目に、教員の指導の変化です。今までは、チョークを持って、黒板の前で、授業をやっていくことが普通でした。でも、今、子どもたちは、1人1台のタブレットを手にしています。このため全ての教育を変えていく必要があるということです。チョークを持って、黒板の前で今日の授業の内容を書いてというところから、転換をさせる必要があると考えています。今まで、長い間同じような教育をしていた教員にとっては、なかなかこれを転換していくのは難しいと思っています。でも、これに取り組むことが一番だと思っています。

3点目は、地域や大学や企業との連携の必要性です。今までもずっと言われていて、それぞれの学校で取り組んできました。この時代の変化に合わせて、このことに関しては真剣に取り組んでいく必要があると思っています。新しく必要になった視点です。これは、2点あって、今ICTがこのようになったときに、技術的な面で最初は学校はWi-Fiも整っていなかった。その中で、全ての環境を整備してきましたが、やっぱり最初は不具合がある。そういうときに、地域の方や大学の方、企業の方に本当に助けていただいた学校がほとんどでした。この点が1点。それから、その2点目では、距離と時間を超えている方たちとつながることができるわけですから学びが大変広がるということです。いろいろな地域から、ゲストティーチャーでも、教員でも出てくることのできるわけです。こういう環境にあるのですから、それを生かしていく教育に変えていく必要があると思っています。この3点が大きな変革になります。

それでは、これに合わせて教育総合センターの機能をどう変えていくか、どういうふうにしていくかというところです。1点目は、先ほどもお話をした変化に応じた教育を推進する教員を育てていかなければいけないということです。今ももう教員たちは、コロナの対応とICTの対応ということで大変な毎日を送っています。よく頑張ってくれているなと私は思っています。その中で、やはり研修機能というか、ここに来ればいろいろなことが分るとか、そういうところにセンターをしていきたい。

それから、先ほど教育委員の皆さんのお話にもありましたが、子どもの変化に応じた子どもへの支援、それから保護者への支援というのをはっきりと打ち出していきたいというふうに思っています。

3点目が、今まで出ていなかった部分ですが、乳幼児教育、切れ目のない支援、今は乳幼児から義務教育の中3まで考えるようになっていきます。または高校への支援も考えていきます。切れ目のない支援というのもこの教育総合センターの大事な機能になっています。

それから4点目が、もう先ほどのお話をした大学、地域、企業とを結ぶ機能です。そういうことを集約していけばいいなと思っています。

教育総合センターは、この変化に子どもたちが向き合って、自らが自分の未来を主体的につくり出すということをビジョンにしています。これをセンターの中核として、世田谷の教育を推進していきたいと思っています。

先ほど委員の皆様からは、地域人材の活用だったり、シンクタンクの機能であったり、時代に合わせた教育であったり、保護者への本当の意味での支援であったりという視点をいただきましたので、また栗井教育監や平沢参与、それから教育委員会全体と話をしながら、区長部局等の支援も受けながらやっていきたいと考えています。

以上です。

○司会 ありがとうございます。教育長のほうからは、展望としまして、大きな変革の3点、それからそれに取り組んでいく4点などをお話いただきました。

それでは、次の議題に移らせていただきます。ここからは少し時間の関係もございますので、時間の許す限りで進めさせていただきたいと思えます。

教育委員会事務局の説明では、教育総合センターの新しい機能として、学校と地域を結び、その教育資源を活用した学校教育の充実支援を行う。そのために地域人材確保事業を行うとのお話がありました。例えば地域の人材や大学、企業との連携も考えられますが、この間、1つ目の質問でも幾つか出てきておりますけれども、こうした教育総合センターの新しい機能に期待することについてお話を伺いたいと思えます。

再度、区長へお伺いいたします。学校と地域を結ぶための教育総合センターの新しい機能について、教育委員会と区長部局とがどのように連携し、支援をしていくべきであるか、お考えをお伺いいたします。

○保坂区長 ここまでの話で、新しい学び、それからICTも含めて、そしてコロナ禍がこれだけ長く1年半続いて、この先は本当に予測困難な時期に入る転換期であるという認識は共有できたと思えます。という中で、世田谷区は、お子さんが生まれる前から、妊娠をされた、そのときからネウボラという子育てと並走していく仕組みを持っていますし、生まれたら、乳幼児のときの健診や、あるいは保育園、待機児童がようやくゼロになりま

したけれども、たくさんの保育園、保育士さんがいます。また、幼稚園もあります。そして、乳幼児の教育と学校と連結していく、そのところが今回のセンターのテーマにもなるかと思います。

今、このコロナ禍1年半を挟んで、例えば産業政策という面で考えてみると、みんな割と共通なのは、この1年半でもう一度、インターネットとかでいろいろつながるということだけではなくて、実は会社に出勤をしないテレワーク、リモートワークも含めて、足元を見る、地域を見る機会が増えた。やはり自分の住んでいるところの近くでしっかりと活動をしたり、社会的な貢献をしている人たちと自分たちも仲間になりたい。できれば、そういう仲間になる中でのそのお役立ちができる仕事を、いわゆる起業、新しい仕事を起こす、こういう形で起業をしたい、そういう若い人たちはとても多いです。

また、コ・ワーキング・スペース、こういったものをつくって、それぞれ異業種で立ち上げながら、30代、40代を中心に、じゃ、新しいコレクティブハウス、いわゆる住まいまです新しいスタイルにしていこうとか、いろんなことが起きています。つながるはキーワードです。それから、お互いの所属とか立場にこだわらず、いいと思ったら、さっと集まって、プロジェクトを組んで協力する気風というのが今の若い人たちにあると思います。

せっかくそういう力があるわけで、もうつながろうとしているわけで、例えば産業政策上の新しい拠点をつくる時に、やっぱり創造的な場、クリエイティブな場であること、新しい技術や研究をしている人たちが自由自在に出入りができること、その中には、子どもたちがとっても重要なんですね。子どもたちがその空間に来たときに、新しい会社、新しい事業を立ち上げようとして、やっぱり失敗していくお兄さん、お姉さんの、あるいは1回失敗したけど、こんなことでやろうなんて、そういう横顔を見るとか、後ろのほうで見ているとか、これはすごく重要なことなんですね。

学校になかなか合わないという子の中には、いわゆるギフテッドと呼ばれるような、ある種勉強を、学校の枠にちょっと合わないところで興味がどんどん膨らんでいくようなお子さんもいらっしゃいます。いろんなタイプのお子さんの中で、やはり産業とか、企業とかいうところでも、今の社会にない価値を新しく提案するタイプの事業、そして実はこれは教育の改革の要求と非常にぴったり一致しているわけなんですね。あるいはタブレットを使って、教育長がおっしゃったように、従来型の板書の代わりにタブレットになったというだけではなくて、どのように創造的に活用するかということだと思います。

教育委員会は、学校の現場の先生方に様々な支援をしていますけれども、事務局はほと

んどが区の職員であります。そういう意味では、区の職員同士、人事異動の中で、区の教育委員会に今籍を置いている職員、そして、その外側には、例えば児童館とか、放課後学童クラブとか、あるいは児童相談所とか、様々子どもにかかわる仕事って、世田谷区の職員の中で相当数いるんですね。保育園もそうです。ですから、そういう子ども全体に関わっていく職員の中のネットワークの中で、学校を所管する教育委員会は独立性がなければいけない。そういう意味では、しっかりと教育委員会の中で教育内容を決めていただく必要があるんですが、しかし、その教育の枠を乗り越えていこうというときに、そのバリアがあまりあってはいけないと思うので、区所管の、今回の教育総合センターの中には、実は世田谷区の研究所、せたがや自治政策研究所、これは区のシンクタンクなんです。この部分が、研究所自体が建物の中に入ります。それから、区職員、5000人を超えますが、その職員の研修を常にやっている研修の担当部門も同じ建物に入ります。物理的には一緒にいるんですが、そこの物理的に一緒になったのをきっかけに、縦割りというか、その部署を隔てている壁を大いにこれは低くして、できれば、場合によってはなくして一緒に協働するとともに、企画をして、挑んでいくと、こういったことを期待したいと思います。

○司会 ありがとうございます。

それでは、このテーマについては、お時間のほうも限りがございますので、教育長のほうにお伺いしたいと思います。こちらは区長から学校と地域を結ぶための新しい機能についてお話を伺っていましたが、それらも踏まえまして、今後についてどのような展望をお持ちになっているのでしょうか、お伺いいたします。

○渡部教育長 それでは、私のほうからお話をさせていただきます。

先ほどからお話をさせていただいているように、やはりキーワードは変化です。これからの時代に必要になる力というのは、今までとは全く違って、基礎基本だけの勉強をしていたり、知識だけを増やすという学習をしていたら、これから必要な力は身につかないと思っています。これからの時代に必要になる力というのは、実社会においては、自分で課題を見つけて、その解決を目指すことが必要になるということです。だから、正解がどこにあるかが分からないという中で、問いに対してそれを解決を目指すなければいけない。今まで、子どもたちは、答えを目指して、それに向かってやっていくという学習をしていたわけです。でも、これから先は、答えが何で、何が正しくて、どの道を通してその解決を目指せばいいかがはっきりしていない中で、自分なりの方法で解決をしていくということになります。そういう中で必要な力は、クリエイティブに考えたり、物事を一面的

ではなく、様々な面から捉えたり、新しい価値観を創造したりする力が必要になるということになります。これは先ほど濫澤委員の話の中にありました。そういうことができるという人材がこれからの時代の主役になる人だと私も思います。

では、学校教育の中で、そういう子どもを育てるにはどうしたらいいんだろうということになっていきます。それで、基礎基本や知識だけを増やすという今までの学習とは違ったところに視点を置いた教育を学校教育の中でやっていく。その中で、STEAM教育というのを皆さん聞いたことがあられるかと思いますが、先ほど平沢参与の話の中にもありました。STEAMというのは、科学、技術、工学、芸術、数学、それをブレンドしたような形の教育になっています。今までは、教科の学習のを学校の中ではやってきました。でも、これは、人間が便宜的に国語だ、算数だというふうに分けてきただけで、全ての学習は本来はつながっているはずだと私は思います。答えのない問いに対して、自分で積極的に攪拌していく力を身につけさせていくということです。これには、学校の中だけではとても追いつきません。だから、さっき区長の話の中にもあったように、新しい考え方で、新しい教育をつくり出していく仲間になっていただきたいということです。企業もそうです。大学もそうです。地域の方たちもそうです。そういう視点を全ての方たちが持って、同じ視点で教育というものを考えていくということが必要になっていきます。

教育総合センターには、区長部局のほうの政策経営部が入りますので、そことも考えを一緒にやってというところで、枠をつくらないというか、そういう教育にこれからチャレンジしていくことが必要だと考えています。

以上です。

○司会 ありがとうございます。このテーマについて教育委員の皆様からもお話を伺いたいところではございましたけれども、時間のほうが迫ってまいりましたので、そろそろ第1部、総合教育会議のまとめに入りたいと思います。

最後に、区長にお伺いいたします。本日の議論で区長と教育委員会が共有しました内容を踏まえまして、予算の編成、執行権を有します区長の立場から、世田谷区が目指すべき教育の将来像と今後の具体的な方向性について、全体のまとめということでお考えをお伺いしたいと思います。

○保坂区長 本日の会議の中で、学びが変わるとか、大きな転換期、そして変化、過渡期、いろんな言葉が語られました。明らかにこれから変わっていくんだと思います。ただ、これを御覧になっている保護者の皆様の中には、やはり日々の学校の様子、教室で落ち着いた

ているかどうか、あるいはその進路が気になる、成績はどうだろうか、いじめなどについてその被害、加害にならないだろうかと、いろんな御心配があるんだと思います。この会議におきましてこうして語っていること、今度センターという形で出発するわけですが、既に希望丘中学の跡地にほっとスクール希望丘という形で、いわば教育委員会がつくって、運営、日常的な指導のほうをNPO法人東京シューレに委託をしてスタートするというものも始まっております。大変多くの方が希望されていると聞いています。

そして、今度、教育委員会のほうでこの弦巻にある教育センターが、単なる引っ越しに終わらせずとはいうものの、その内容については移転をしていくと。なので、その跡地については、不登校特例校ということでの設置を来春用意していると聞いています。具体的に論じているだけではなくて、次々とプログラムが進んでいるんですね。できれば、私のほうは、芸術を基本に公立学校でしっかりと体を動かしたり、物を表現したりということが思いっきりできるような教育の場もぜひ準備したいなというふうにも考えています。

今日の議論は時間の制約上、ここで終わりますけれども、恐らく御覧になっている皆さんの中で、自分ならここを聞きたい、あるいは提案をしたいという方もいらっしゃるかもしれない。この総合教育会議で一方通行にならずに、しっかりと皆さんとのやり取りを、このセンターも教育委員会がつくって、教育委員会が使うという狭いものではなくて、世田谷区民共通の財産として、みんなの教育センターができた、そんなセンターになるように、これからオープンまでの時期に区民の皆さんの声をどんどん出していただいて、子どもたち自身もわくわくするような、そんなセンターに持っていける議論のオープン前の機運の醸成はこれからだなというふうに思います。これからもよろしく願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

以上をもちまして、本日の第1部、令和3年度第1回総合教育会議を終了させていただきます。改めまして、皆様、長時間にわたり御参加、それから御聴衆いただきましてありがとうございました。

ここで10分程度の休憩を入れさせていただき、第2部の教育推進会議につきましては、予定どおりの午後2時25分から開始いたしますので、それまでそのまましばらくお待ちください。

本日はどうもありがとうございました。

午後2時12分閉会